

能力別日本語教育の効果 —留学生別科日本語教育を事例に—

The Effectiveness of Japanese Classes Based on Proficiency : Cases of Japanese Courses for International Students

小笠原 典子
Noriko OGASAWARA

要旨

留学生別科では2007年より現在行っているテスト形式で、前期（4月）、後期（9月）の各学期はじめにクラス分けのためのプレースメントテストを実施している。テストの目的は、新入学生に対しては、能力に適したクラスに効率よく的確に配置することであり、半期学習後の学生に対しては、次に進むべき適切なクラスを決定することにある。

本稿では留学生別科で実施している日本語プレースメントテストの結果を通し、日本語教育におけるレベル別クラス設置の必要性の再確認と、レベル別クラスの効果进行分析し、考察する。

はじめに

本学留学生別科では、2000年4月の設立以来、日本語レベル別クラス編成による教授方式を採っている。各年度前期（4月）、後期（9月）の授業開始前にプレースメントテストを実施し、クラス分けを行う。現在実施しているプレースメントテスト¹⁾は、2007年前期より導入し、現在に至っている。この間、面接試験による判定と筆記試験による判定の関係性については検証を行った（小笠原典子、2010）が、半期学習後の学力の伸びに関してはデータを基に具体的に考察を加えていない。

本稿では、留学生別科プレースメントテストの結果をもとに、レベル別クラス設置の必要性を再確認し、レベル別クラスによる教育効果に関して分析検討を加える。

¹⁾ 新入学生に対しては、筆記試験と面接試験を実施し、半期継続学習者には筆記試験を実施している。筆記試験は全学生に対して共通の問題を出題している。

分析データは、2013年9月から2016年4月までのプレイスメントテストの結果²⁾による。また、データ処理はテストの素点を用いた基本的データ処理に基づいて行う。

1. 日本語クラスの概略

現在の留学生別科日本語クラスは表1に示すとおりである。

表1 日本語クラスのレベル

レベル	開講時レベル	終了時のレベル	次学期
初級	初級基礎から開始	日本語能力試験N5・N4	初中級
初中級	初級後半から開始	日本語能力試験N4・N3	中級
中級	中級学習から開始	日本語能力試験N2	上級①・上級②
上級①	上級段階から開始	日本語能力試験N2・N1	上級②
上級②	上級段階から開始	日本語能力試験N1	上級②

各学期、初級から上級までの4ないし5クラス開講で、学習者は1学期（半期）学習後、一段上のクラスに進む。学習状況によっては飛び級で次のクラスを飛び越える、あるいは同一段階にとどまる場合もある。表中の開講時レベルとは、どの段階から学習を始めるかという、学習開始の段階を指し、終了時レベルとは、そのクラスで半期学習した後の到達予想レベルを表す。また、次学期の欄は次の学期に進むクラスを示す。

2. プレイスメントテストの概略

プレイスメントテストの出題レベルと得点比率構成は、表2に、また、出題準拠は表3に示すとおりである。

表2 プレイスメントテストの得点比率

レベル	初級 前半	初級 後半	初級 合計	中級 前半	中級 後半	中級 合計	上級 合計	全体
得点	66	76	142	33	31	62	23	229
全体比率	0.29	0.33	0.62	0.14	0.14	0.27	0.10	1.00

表3 プレイスメントテスト出題準拠³⁾

初級前半	『みんなの日本語初級Ⅰ』 第1課～第22課
初級後半	『みんなの日本語初級Ⅰ』 第23課～第25課・『みんなの日本語初級Ⅱ』 第26課～第50課
中級前半	『文化中級日本語Ⅰ』 ・ 日本語能力試験N3出題程度
中級後半	『文化中級日本語Ⅱ』 ・ 能力試験N2出題程度
上級	日本語能力試験N1出題程度

²⁾ 2013年度より協定校からの受け入れが開始された。バックグラウンドが同じ受験者からのデータを用いるため、データ集計は2013年度後期からとした。

³⁾ スリーエーネットワーク（2007）『みんなの日本語初級Ⅰ』
スリーエーネットワーク（2007）『みんなの日本語初級Ⅱ』
文化外国語専門学校（2004）『文化中級日本語Ⅰ』
文化外国語専門学校（1997）『文化中級日本語Ⅱ』

プレイスメントテストは第1部から第7部まで7段階で構成され、第1部・第2部が初級前半、第3部・第4部が初級後半、第5部が中級前半、第6部が中級後半、第7部が上級レベルにあたる。問題は初級前半から提示され、ページが進むほど難易度が上がり、学習者の力によって、各レベルの得点に差が生じるようになっている。表2での得点とは、全体配点（229点）のうち、各レベルでの配点を示し、全体比率とは、全体を1としたときの、各レベルの配点が占める割合を表す。

獲得得点とクラス配置の基準目安は次のとおりである。

表4 プレイスメントテストの得点とクラス分け

クラス	総合得点 (X)
初級	$0 < X < 20$
初・中級	$20 < X < 35$
中級	$35 < X < 45$
中・上級	$45 < X < 55$
上級	$55 < X$

3. レベル別クラスによる教育の必要性

本学協定校を含めた中国の日本語教育機関での教育状況をみると、レベル別クラス編成授業を採用している機関⁴⁾は多くないと聞く。入学の時点で日本語学習経験者が少ないためか、初年度にレベルを分けることなく、初級の段階から一斉に授業を始め、学年進行後も、授業内容の段階は進むが、クラス分けを行うことなく授業を進行させているようである。

これに対して、日本国内の日本語学校や留学生別科では、レベル別クラス編成をとっている機関が多い。①日本語学習に特化し、限られた時間で日本語力を上げることを目標にしていること、②学習開始時の学習者の日本語力に差が大きくみられること、③学習者の背景が多様であること、などを考慮すると、レベル別クラス編成の採用がよりよい選択であり、効率よく学習効果も高められているといえる。

さて、本学留学生別科においてもレベル別クラス編成を採用しているが、入学時点で学生の日本語力にどのような差がみられるのであろうか。

新入学生の初回プレイスメントテストの得点分布を表したものが表5、表6であり、獲得得点の分布を示したものが図1である。いずれも素点をもとに算出している。

表5より、どの試験も初級前半ほど得点が高く、初級後半、中級、上級に進むほど得点が低くなることがみられる。また、得点のばらつきが大きいことも読み取れる。このことから、日本語力が初歩の段階（日本語学習を始めたばかり）の学生から、すでに高度な力を身につけている（日本語能力試験N1段階に達している）学生まで、日本語力に大きな隔たりをもって入学してくることがわかる。

⁴⁾ 本学協定校の一つである武漢外語外事職業学院外国語学部欧亜言語学科主任補佐李育英氏（2016年9月～2017年3月まで本学研究員）によると、日本語専攻学科では、ほとんどの学生が入学後に日本語学習を始めるため、初年次にレベル別のクラス授業は実施されておらず、2年次進級の際にもクラス分けテストを行うことなく、1年次と同じクラスで学習を続けている。中国の大学における日本語教育ではこの形をとっているところが多いであろうとのことである。

表5 初年度プレイメントテスト 平均点とSD

実施	受験者数		初級			中級			上級	総計
			前半	後半	総合	前半	後半	総合	総合	
2013秋	29	平均点	41.1	22.0	30.9	16.4	7.6	11.8	1.6	22.7
		SD	32.6	24.5	27.6	27.8	20.4	23.3	5.7	22.8
2014春	31	平均点	56.7	32.3	43.6	24.2	14.8	19.6	3.1	32.8
		SD	26.2	19.6	21.9	23.1	16.7	18.8	11.4	18.0
2014秋	21	平均点	37.9	21.2	29.0	16.3	6.1	10.0	4.1	21.6
		SD	27.0	22.3	23.5	22.6	13.6	16.2	13.6	19.9
2015春	22	平均点	59.0	24.4	40.1	17.0	11.6	14.4	2.0	28.9
		SD	22.6	19.6	19.5	20.4	17.8	17.7	6.0	16.1
2015秋	49	平均点	49.1	24.1	35.7	17.7	13.5	15.7	2.9	26.8
		SD	26.6	20.1	21.9	18.7	17.8	17.0	10.2	18.0
2016春	31	平均点	56.4	31.2	42.4	23.1	10.4	16.9	1.7	31.6
		SD	23.3	24.2	23.9	24.1	12.6	17.6	7.3	18.2

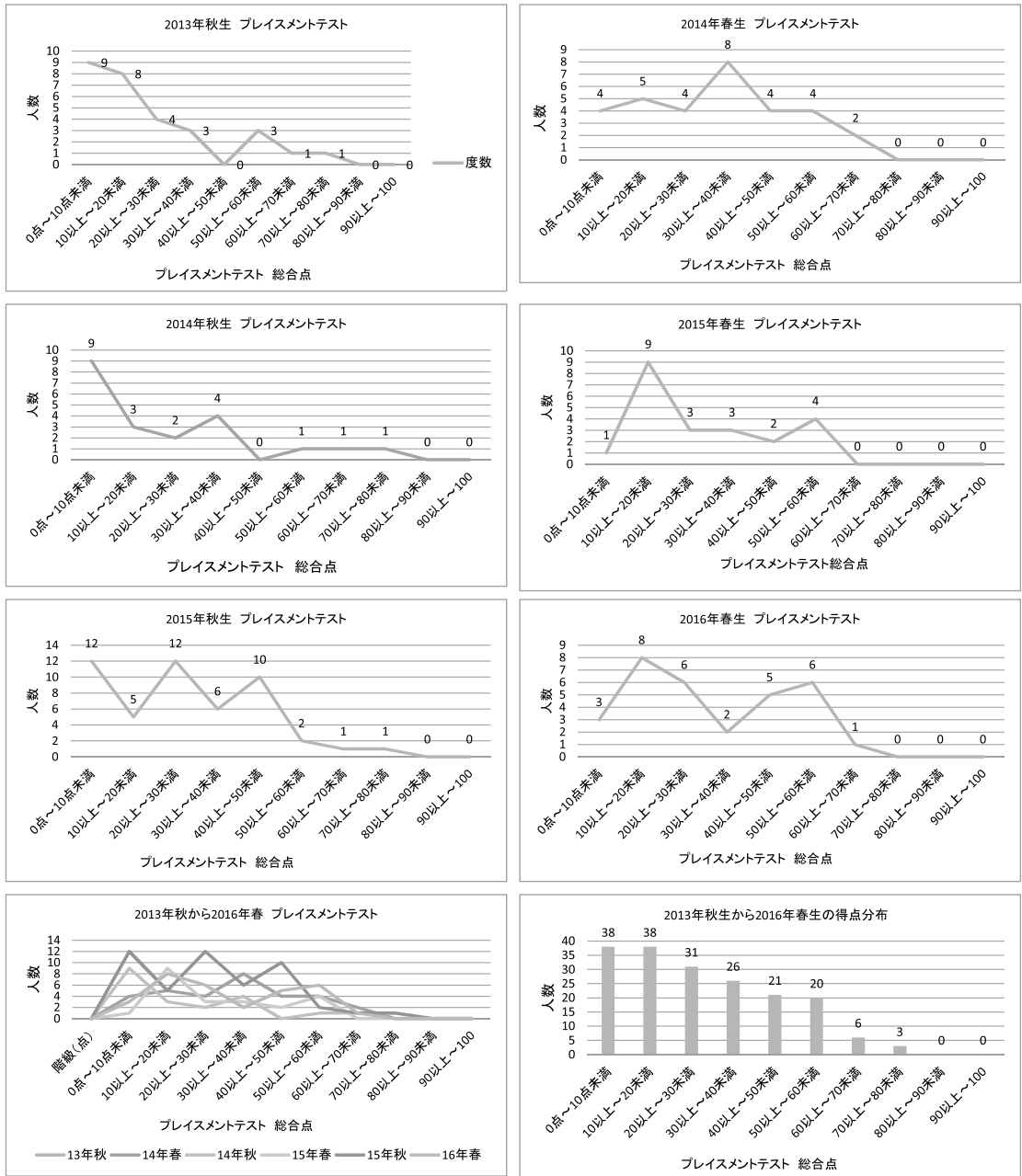
表6 プレイメントテスト獲得得点 度数分布表

階級 (点)	13年秋	14年春	14年秋	15年春	15年秋	16年春	総数
0点～10点未満	9	4	9	1	12	3	38
10以上～20未満	8	5	3	9	5	8	38
20以上～30未満	4	4	2	3	12	6	31
30以上～40未満	3	8	4	3	6	2	26
40以上～50未満	0	4	0	2	10	5	21
50以上～60未満	3	4	1	4	2	6	20
60以上～70未満	1	2	1	0	1	1	6
70以上～80未満	1	0	1	0	1	0	3
80以上～90未満	0	0	0	0	0	0	0
90以上～100	0	0	0	0	0	0	0
受験者数 (人)	29	31	21	22	49	31	183

表6、図1からも各受験者の得点のばらつきが大きいことが認められる。表4で示すとおり初級クラスに配置される得点 ($0 < x < 20$) が高い度数を示し、初中級、中級に行くにつれ度数が減少し、上級レベルに当たる受験者は最も少ない。獲得得点の幅が10点～20点高くなるにつれ、学習レベルも一段上がる。レベルが下位段階にあればあるほど、レベルが一つ上下するだけで学習内容も大きく異なり、日本語を使ってできる事柄 (小笠原典子、2010) にも差が生ずる。こうした段階の学生を同一クラスで教育するのは効率的ではない。

限られた時間にできるだけ日本語力をつける教育が必要な場合、入学年度が同じであるという理由で学習者を同一のクラスで学習させるより、学習者の力に合わせたレベル別教育のほうが望ましい。学習者の力に応じたレベル別クラス編成は必要であるといえる。

図1 入学時プレACEMENTテスト得点の度数分布
 —2013年秋から2016年春までのテスト得点の広がり—



4. 半期学習後の日本語力の伸び

留学生別科で学習を始めた学習者が半期間でどのような力の伸びを見せるであろうか。

表7は2013年後期より2016年前期までの各クラスにおける半年間の伸びを示したものである。また、図2は半期間学習後の日本語の伸びを表す。

表7 クラスごとの半期の学力の伸び

① 初級クラスから初中級クラスへ

	初級前半	初級後半	初級総合	中級前半	中級後半	中級総合	上級	総合
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
平均	20.7	6.3	13.0	3.4	3.7	3.3	0.0	9.0
SD	18.9	4.2	9.6	5.6	6.5	4.6	0.0	6.2
平均	77.2	32.8	53.5	9.1	6.9	8.0	2.7	35.8
SD	12.7	14.5	11.9	9.5	9.0	7.6	8.3	8.3
伸び幅	56.6	26.5	40.5	5.7	3.2	4.7	2.7	26.8

② 初中級クラスから中級クラスへ

	初級前半	初級後半	初級総合	中級前半	中級後半	中級総合	上級	総合
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
平均	47.7	17.9	31.8	8.0	4.5	7.5	0.2	21.3
SD	15.5	8.4	11.0	9.5	10.4	12.2	1.4	7.9
平均	69.9	48.1	58.3	27.4	9.8	17.8	2.9	41.7
SD	12.4	19.2	14.9	19.5	16.4	15.1	14.4	12.6
伸び幅	22.3	30.2	26.5	19.4	5.4	10.3	2.7	20.4

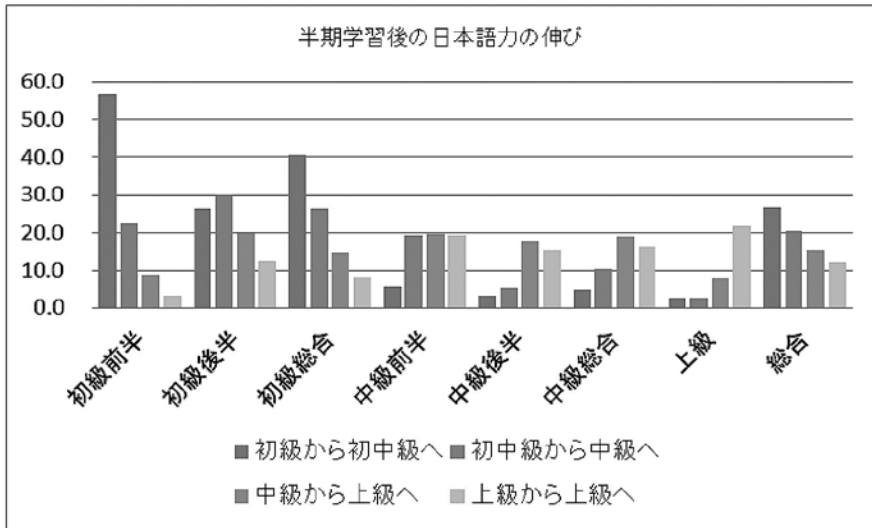
③ 中級クラスから上級クラスへ

	初級前半	初級後半	初級総合	中級前半	中級後半	中級総合	上級	総合
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
平均	62.0	29.9	44.9	23.6	8.8	15.0	0.8	32.6
SD	14.6	11.2	11.4	12.4	9.8	9.7	3.3	8.6
平均	70.9	49.9	59.6	43.2	26.5	33.8	8.6	47.8
SD	10.7	12.9	9.4	17.1	18.7	17.3	13.8	9.5
伸び幅	8.9	19.9	14.8	19.6	17.7	18.9	7.8	15.1

④ 上級クラスから上級クラスへ

	初級前半	初級後半	初級総合	中級前半	中級後半	中級総合	上級	総合
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
平均	76.9	49.0	61.9	42.8	28.6	35.8	5.8	48.9
SD	11.0	13.1	10.5	17.0	18.0	14.4	9.3	8.7
平均	80.1	61.4	70.1	62.1	44.0	52.1	27.7	61.1
SD	10.4	13.7	11.1	17.8	20.6	18.6	27.1	11.3
伸び幅	3.3	12.4	8.2	19.3	15.3	16.2	21.9	12.1

図2 半期学習後の日本語力の伸び



(1) クラス別の半期学習後の伸び

表7の平均の数値は、2013年後期から2016年前期までに行われたプレイメントテストのクラスごとの、問題別の獲得得点⁵⁾である。上段は入学時に行ったプレイメントテストの結果であり、下段は後期開始前に行ったプレイメントテストの結果である。前期後期の間には、春期休暇、夏期休暇などの長期休暇が入る。

表中の初級前半の数値は1部から7部までの問題の中で、初級前半レベルの問題に対する正答率である。初級後半以降も同様である。表中の総合はプレイメントテスト全問題に対する正答率を表す。また、表中の①初級から中級へは、入学時に初級のクラスに配置され次学期に初中級に進むことを表す。②初中級から中級クラスへ、以下同様である。

表中の上段の平均値は、入学時のプレイメントテストの結果を表し、下段の平均値は、次の学期のクラス分けの際に実施したテストの結果を表す。

伸び幅は後期プレイメントテストの結果から前期プレイメントテストの結果をマイナスしたものである。また、太字で記した数字は、所属するクラスで重点的に学習する内容に関して出題された問題への正答率を表す。

表7、図2から、どのクラスでもすべての学習段階において半期学習後の得点に伸びがみられる。特に重点学習での伸びは顕著で、このことよりクラス別学習の効果は読み取れる。とりわけ①初級クラスから初中級クラスへ、では重点学習について著しい伸びがみられる。初歩からの学習開始であるため、学びの結果がそのまま伸びに表れているといえる。これに対し、中級以上の段階での伸びがみられないが、これは中級段階が学習範囲外であるため、当然の結果と言える。②初中級から中級へ、③中級から上級へ、④上級から上級へ、のクラスでも、重点学習の範囲では明らかな伸びがみられる。だが、③、

⁵⁾ 飛び級および同一クラス残留の学生、テスト欠席者はデータに含まない。

④のクラスにおいて既習である初級前半、初級後半の問題に対する半期後の獲得得点の伸びが、①、②のクラスの得点の伸びより下にあるのは何を示すのであろうか。

(2) アンバランスな学習の伸び

③中級クラスから上級クラスへ、④上級クラスから上級クラスへ、においても重点学習した内容に関しては伸びがみられるが、下位段階の項目に関する大きな伸びは見られない。日本語力が上がるにつれ、どの段階の力も平均して上昇するだろうと予想するものの、初級段階に関しては半期学習後も顕著な伸びがみられない。すでに獲得している初級の学習内容が磨かれることなく定着してしまっているのだろうか。

実際に留学生を教授しているところの伸びのバランスの悪さに出会うことがある。日本語教育において、初級段階の学習は具体的な語句を使い、文型を積み上げ、単文単位の学習から始まる。扱う話題も日常生活に則したものである。初中級、中級に進むと、徐々に抽象語の習得が始まり、段落のある文章の読み書き、抽象的なテーマに関しての意見発表が可能になるような学習項目が加わる。さらに学習が進み、上級段階になる。

中上級段階になると学習者は大きく二つのタイプに分かれるように思える。一つは文字通りの中上級日本語学習者であり、他方はアンバランスな力を持つ中上級日本語学習者である。後者は、日本語能力試験N1を取得しているも、文章表現や発表の場面で、基本的な初級段階の文法、表現が正確に身につけていない場合がある。教授する側がこうした誤りに気づくたびに、添削や言いかえなどで注意を促すのであるが、学習者側は、自分は「N1に合格している上級レベルだ」という意識からか、基礎に戻って学習し、自らの日本語力をさらに高めようとする様子はそれほど見られないことが多い。初級の段階の学習を正確に、適切に身につけ、表現することができれば、日常のやりとりの範囲では、他者から「日本語に堪能な人物」としての評価を受けることができる。すでに上級レベルの段階に到達している学生にとって、基本が正確に身につけられていないことは残念なことである。学習者に対して、自らの日本語力をすべての技能（話す・聞く・読む・書く）で高めるために基礎を固めることは不可欠な事柄であると示し、学習を促すことが求められる。しかしながら、こうした力のバランスを欠いた学習者を育ててしまうということは教授する側が大いに反省すべき点であり、偏りのない力を身につけられるよう教授することが教員の責務である。今後の課題にすべき一点である。

以上のべたような問題点はあるものの、レベル別クラス編成による教育は、初級から上級までのどの段階でも半期学習後にプラスの伸びがみられ、レベル別クラス学習の効果が見られると結論づけることができる。

5. まとめと今後の課題

本稿ではプレイスメントテストの結果をもとに、まず、レベル別クラス編成の必要性を考察したが、その必要性が再確認でき、今後も引き続き実施が求められる方式だと認められた。また、レベル別クラス編成教育の効果に関しても、各段階クラスで伸び方の差は認められたものの、重点学習に対してはどのレベルにおいても大きな学習の伸びが明らかに見られ、レベル別クラス編成による教育効果が確認された。

今後の課題として、次のことがあげられる。

① 基礎力の向上

初級学習を終えた学習者や中上級段階の学習者は、すでに習得した学習内容の質を上げることより次の段階の学習内容の習得に力を注ぐ。これはクラスでの教授内容から見ても当然のことであり、学習者ばかりでなく教授側にもみられる。しかし、より洗練された日本語使用者となるには、下位段階の学習についてもさらなる力のアップが求められる。その実現ために、学習者に単なる復習に過ぎないと感じさせない教授法と教材の開発が必要である。

② 学習の伸びのフィードバック

留学生別科に入学する学生の日本語力は、本稿で表したように初歩から上級まで広がり大きい。また、同じ段階の学習者であっても、個々の学習者には力のばらつきがあり、その力の伸びにもばらつきがみられる。半期学習後のプレイスメントテストは学習者が次に進むべきクラスを示すのみで、半期学習後にどのような学習の伸びがあったかは示していない。今後は個々の学習者に対して、どのような学習の伸びがあったか、具体的に視覚的に確認できる、迅速なフィードバックが必要である。

③ 学習の定着と運用力の向上

留学生別科では各学期末に「日本語力だめし」という全学生に対して共通の習熟度を測るテストも実施している。出題内容は「漢字の読み書き」「語彙」「文法」「読解」で、日本語能力試験にほぼ準じている。現在はこれをもとに、項目別の学習者の力、全体の中の自分の位置などのフィードバックを行っている。今後はこれらのデータを分析し、学習内容の定着と運用力の向上が測れるテスト開発につなげたい。

参考文献

- 荒まゆみ (2016) 「入学時の日本語プレイスメントテスト結果から見る留学生の日本語能力の一考察」『尚美大学総合政策研究紀要』第27号 pp.71-86
- 小笠原真司 (2011) 「英語習熟度別クラスの効果とG-TELPによる成績分析—工学部総合英語Ⅲのデータを中心に」『長崎大学大学教育機関開発センター紀要』第2号 pp.9-19
- 小笠原真司 (2012) 「英語習熟度別クラスの効果的運用について—工学部総合英語ⅢのG-TELPデータによる分析—」『長崎大学大学教育機関開発センター紀要』第3号 pp.9-20
- 小笠原典子 (2010) 「インタビューによる日本語能力ステージ評価法の検証—段階別質疑応答による面接試験評価と筆記試験評価の関連—」『十文字学園女子大学社会情報論叢』第14号 pp.31-49
- 鈴木英明、ヨフコバ四位エレオノラ (2014) 「習熟度の異なる学習者に対する授業の可能性と課題：初級日本文化クラスの実践を通して」『筑波留学生センター日本語教育論集』第29号 pp.93-104
- 平弥悠紀、米澤雅子ほか (2010) 「同志社大学における日本語プレイスメントテストの分析と妥当性の検証」『同志社大学日本語・日本研究』第8号 pp.1-16
- 目時光紀 (2013) 「習熟度別に見たT大学1年生の英語力の変化」『天使大学紀要』第14号 pp.61-75
- YUAN Xiujie, Li Yunan (2014) 「習熟度別クラス分けによる日本語聴解授業の試み」『日本語教育方法研究会誌』第21号 pp.42-43

